

人工知能学会 \LaTeX スタイルファイルの使い方

How to Use a \LaTeX Style File (jsai2e.cls)

人工知能学会 \LaTeX スタイルファイル 担当 人工知能学会
 jsai2e.cls 担当 Japanese Society for Artificial Intelligence
 JSAI Style File Group editor@ai-gakkai.or.jp, <http://www.ai-gakkai.or.jp/jsai/journal/download.html>

Summary

This is the guide for jsai2e.cls, for the Journal of Japanese Society for Artificial Intelligence.

1. ま え が き

このスタイルファイル (jsai2e.cls) は、人工知能学会の論文などの原稿を作成するためのものです。アスキー版日本語 \LaTeX の Version p2.1.5 以降を対象としています。 \LaTeX 209 も利用できますが (付録 A)、最終組版は \LaTeX で行うため、完全に同じ出力は保証できません。

このスタイルファイルでは本誌の組版体裁に従って調整していますので、スタイルファイルの変更は一切しないでください。

\LaTeX 2 ϵ 用のクラスファイルとテンプレートです。

jsaiart.cls	論文用クラスファイル
jsaiopt.cls	論文以外のクラスファイル
jsai2e.cls	共通部分用クラスファイル
template-j.tex	日本語論文用テンプレート
template-o	論文以外のテンプレート

補助用の jsai2e.cls は必要ですので jsaiart.cls や jsaiopt.cls と同じ場所においてください。

1.1 このガイドの構成

人工知能学会の原稿は次のように分類できます。

論文形式	原著論文, 萌芽論文, 速報論文, 特集論文, 招待論文, 特集, 小特集, 報告, 解説, AI マップ
論文以外の形式	巻頭言, 研究室紹介, 随想, イベントだより, 会議報告, 用語解説, 書評, 文献紹介, カレンダー, 私のブックマーク

2 章～3 章で、はそれぞれ、日本語の論文形式の原稿、論文以外の形式の原稿に書式と固有の注意点について述べます。

4 章は、句読点, 脚注, 相互参照, 拡張マクロについての注意点です。5 章は図表の注意で、POSTSCRIPT ファ

イルの取り込みに関する規定などを述べます。6 章は数式に関する注意です。amsmath を用いる場合は特に注意してください。7 章は参考文献に関する注意点で、最後の 8 章は、提出するファイルに関して述べます。

2. 日本語の論文形式の原稿

jsaiart.cls を使用し、オプションとして ([] 内) 下記のものを指定します。指定がなければ originalpaper になります。

originalpaper	原著論文 (Original Paper)
exploratorypaper	萌芽論文 (Exploratory Research Paper)
shortpaper	速報論文 (Short Paper)
specialpaper	特集論文 (Special Paper)
invitedpaper	招待論文 (Invited Paper)
Specialissue	特集 (Special Issue)
specialissue	小特集 (Special Issue)
interimreport	報告 (An Interim Report)
surveypaper	解説 (Survey Paper)
aimap	AI マップ (AI map)

例えば、原著論文であれば次のようになります。

```
\documentclass[originalpaper]{jsaiart}
```

2.1 原稿の書き方

図 1 に原稿の全体構成を示します。テンプレートファイル template-j.tex が用意してありますので、これを編集して原稿を作成してください。

§1 Vol と No

Vol には \Vol{15} のように巻数 (1985 年が第 1 巻) を指定します。No は \No{1} のように号数を指定します。論文が採録されて、掲載号が通知されたのち正しい巻と号を指定します。よって、投稿時には指定しなくても問題ありません。

```

\documentclass[originalpaper]{jsaiart}
\Vol{16} %%論文誌の巻数
\No{6} %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{日本語タイトル}
\etitle{英語タイトル}
\author{%
  \name{姓}{名}{ローマ字読み}
  \affiliation{日本語所属名}{英語所属名}{%
    {e-mail,URL}}
}
\and
\name{姓}{名}{ローマ字読み}
\affiliation{日本語所属名}{英語所属名}{%
  {e-mail,URL}}
}

\begin{keyword}
keywords in English
\end{keyword}

\begin{summary}
summary in English
\end{summary}
%\setcounter{page}{1}

\begin{document}
\maketitle
\section{まえがき}
%% 原稿の内容（省略）%%

\begin{acknowledgment}
%% 謝辞原稿の内容（省略）%%
\end{acknowledgment}

\begin{thebibliography}{}
\bibitem[]{}
\bibitem[]{}
\end{thebibliography}

\appendix
\section{付録}
%% 付録原稿の内容（省略）%%

\begin{biography}
\profile{会員種別}{著者名}{略歴内容}
\end{biography}

\end{document}

```

図 1 原稿の構成

§ 2 SubNo

論文番号を指定しますが、これは事務局が決定するため、指示がなければ何もしなくて結構です。

§ 3 jtitle

日本語タイトルを書きます。タイトル中に改行 (\\) を指定すれば、タイトル中で改行できますが、柱 *1では無視されます。長すぎて、柱に収まらない場合は、

```
\jtitle[柱用タイトル]{タイトル}
```

のようにすれば、柱には [] 内のものが使われます。

§ 4 etitle

英語タイトルを書きます。前置詞、接続詞、文中冠詞等を除き単語の先頭文字を大文字にします。

§ 5 jsubtitle と esubtitle

サブタイトルがある場合は、これらを用いて指定します。\\jsubtitle は日本語用、\\esubtitle は英語用です。これらは柱には出力されません。

§ 6 author, name, affiliation

著者のリストを、以下のように指定します。

```

\author{%
  \name{姓}{名}{ローマ字読み}
  \affiliation{日所属}{英所属}{e-mail,URL}
}

```

\\name の第 1 引数は著者の姓を、第 2 引数は名を指定します。第 3 引数は著者のローマ字名を指定します。また、名前が長い方は\\name の代わりに\\longname を使ってください。

著者の所属などは \\affiliation に指定します。第 1 引数は著者の日本語所属名を、第 2 引数は英語所属名を指定します。第 3 引数は著者の e-mail アドレスを指定し、ホームページがあれば、“;” に続けてそのあとに URL を記してください。URL 中の “~” はそのまま（エスケープしないで）書いて下さい。

複数の著者の場合

複数の著者の場合は\\and を使用します。

```

\author{%
  \name{姓 1}{名 1}{ローマ字読み 1}
  \affiliation{日所属 1}{英所属 1}{e-mail,URL}
\and
  \name{姓 2}{名 2}{ローマ字読み 2}
  \sameaffiliation{e-mail,URL}
\and
  \longname{姓 3}{名 3}{ローマ字読み 3}
  \affiliation{日所属 3}{英所属 3}{e-mail,URL}
\and
  \longname{姓 4}{名 4}{ローマ字読み 4}
  \affiliation{日所属 1}{英所属 1}{e-mail,URL}
}

```

同じ所属の著者が連続する場合は\\affiliation の代わりに\\sameaffiliationを利用して、メールアドレスと URL だけを記述してください。上の例では、著者 1 と 2 は所属が同じため著者 2 の所属は\\sameaffiliationを利用します。ただし、同じ所属でも、連続していない場合は\\affiliationを用いています。著者 4 は著者

*1 ヘッダ、ページ上部のページ数などがある部分

1 と所属が同じですが、間の著者 3 の所属が異なるため \affiliation を利用します。

著者が多い場合 (4 名以上) には、\author の前で \manyauthor を使いて、著者名の行間を詰めてください。

§ 7 keyword

keyword 環境の中に 2~5 語の英単語を、略語や固有名詞などの場合を除き小文字で列挙してください。

§ 8 summary

要約は summary 環境の中に、「速報論文」は 200 ワード、それ以外は 200~500 ワードで英文で記述してください。

§ 9 本文

要約までを書いたあとに、

```
\begin{document}
\maketitle
```

と指定してから、本文を記述します。

§ 10 acknowledgment

謝辞があれば、acknowledgment 環境に記述します。

§ 11 付録

付録がある場合は \appendix を用います。これ以降、\section の番号は (A.1), (A.2) ... となります。

§ 12 著者の紹介

著者の略歴は以下のように記述します。

```
\begin{biography}
\profile{m}{知能 太郎}
{19xx 年 xx 月 xx 大学工学部情報工学科卒業。原稿の内容 (省略)}
\end{biography}
```

第 1 引数には正会員、学生会員などの会員種別別を、下のように、m, s, h, n のいずれかで指定します。

指定する文字	日本語の場合	英語の場合
m	正会員	Member
s	学生会員	Student Member
h	名誉会員	Honorary Member
n	(なし)	(なし)

第 2 引数は著者名ですが、姓と名の間は必ず半角のスペース で区切ります。第 3 引数の略歴は 200 字以内です。

解説記事だけは、写真・略歴が前掲である場合には、\profile* を用いて省略できます。

```
\profile*{m}{知能 次郎}
{前掲 (15 巻 1 号, p.714) 参照。}
```

3. 論文形式以外の原稿

3.1 原稿の種類と jsaiopt.cls のオプション

jsaiart.cls ではなく、jsaiopt.cls を用います。原稿の種類に応じて、\documentclass のオプションに以下のものを指定します。

タイプ別	オプション	原稿の種類
巻頭言など	commentary foreword essay	巻頭言 特集「……」にあたって 随想
巻末掲載物	laboratoryreport eventreport conferencereport glossary bookreview paperview calendar	研究室紹介 イベントだより 会議報告 用語解説 書評 文献紹介 カレンダー

3.2 巻頭言などの書式

「巻頭言」「特集『……』にあたって」「随想」の三つのタイトルには \jtitle を使いますが、

```
\author{\commentator{}}{}
```

のように記述する点が論文と異なります。なお姓と名は半角スペース () で区切ってください。

随想では、タイトルは柱にも出力されます。

各書式の詳細は付録 C にまとめました。

3.3 巻末掲載物の書式

「研究所紹介」の研究所名、「会議報告」の会議名、「用語解説」のタイトルなどを \jtitle{} で指定します。

「書評」と「文献紹介」は \bookinfo{} に書籍のタイトル、出版社、発行年を指定してください。

```
\bookinfo{Knuth, D.E.: {\it The \TeX book},
Addison-Wesley (1994)}
```

これは、\begin{document} より前に書いてください。

末尾に著者名がある原稿は

```
\author{\commentator{姓 名}{所属名}}
```

とすれば、1 行なら対応したマクロが用意してあります。姓と名は半角スペースで区切ってください。

各書式の詳細は付録 D にまとめました。

3.4 「カレンダー」用のマクロ

\FromTo にはカレンダーの範囲をそれぞれ、プリアンブルで指定します。見出しのライン上の右横に出力されます。

```
\FromTo{1996 年 11 月}{1997 年 11 月}
```

Calendar 環境の書式は以下のとおりです。

```
\begin{Calendar}{会議などの名称}
\Date{開催日付}
\Location{開催場所}
\Contact{連絡先}
\Note{注意書き}
\end{Calendar}
```

Calendar 内で改行する場合は、\hfil\break を使い、\par および空行は使用しないでください。

4. 原稿全般に関する注意点

4.1 句読点

日本語の句読点はカンマ (,) とピリオド (.) を使用し, “,” や “.” は使用しないでください. また, 数式や英文中でのみで半角の句読点を用い, 日本語文中では全角の句読点を使用してください.

2 倍ダッシュ (ダーシ) の “——” は, 英文中を除き, 日本語の中では `\ddash` を用いて下さい.

4.2 脚注

脚注マークは, カウンターが進むごとに *1, *2, *3 となります.

`\section{}` や `\subsection{}` などの中では脚注は利用できません.

タイトル中で脚注をつける場合は, 以下のように手動でカウンタの値を調節する必要があります.

```
\affiliation{(株) 人工知能研究所}
\footnotemark[1]%
{Artificial intelligence Research Inc.}%
{email@ai-gakkai.or.jp}
```

のように `\footnotemark[<脚注番号>]` で番号を付けて

```
\begin{document}
\maketitle
\footnotetext[1]{現職: 人工知能大学}
\setcounter{footnote}{1}
```

内容は `\footnotetext[<脚注番号>]{<脚注の内容>}` によって記述します. そのあとにカウンタ `footnote` をタイトル中で用いた最後の脚注番号にします. これらは `\maketitle` の直後に記述します.

4.3 相互参照

図表の相互参照は図表環境内に例えば `\ref{fig:1}` などと指定すれば, “図 1”, “表 1” と出力されます.

式に, `\label{eq:01}` のようにしてラベルをつけていれば, `\ref{eq:01}` によって参照できます. 参照箇所では, 明示的に括弧をつけなくても, (1) などのように出力されます. ただし, `amsmath` スタイルを利用する場合は注意点がありますので, 6.2 節を参照してください.

同様に, `section` の番号を参照すると “1 章”(英語では “Chapter 1”), `subsection` は “1.1 節”, `subsubsection` は “1.1.1 節” のように `\ref` だけで “章” や “節” が補われます.

その他の参照は, 番号のみを出力しますから, 出力結果にあわせるようにしてください.

4.4 拡張マクロ

次の拡張マクロがあります.

<code>\QED</code>	「証明終」の (□)
<code>\MARU{1}\$\sim\$\MARU{5}</code>	①~⑤
<code>\kintou{4zw}{時間}</code>	均等割り付け: 時間
<code>\ruby{闕}{しきい}値</code>	ルビ: 闕 ^{しきい} 値
<code>\onelineskip</code>	1 行アキ
<code>\halflineskip</code>	半行アキ

通常の \LaTeX では, `\,` や `\;` は数式中で利用できませんが, 本スタイルファイルでは数式以外でも使えます.

`\section{}` や `\subsection{}` などの中に `\verb` を用いて `\ % $ # _` などが使えませんが, 以下の回避方法があります.

```
\def\tbs{\litt{\char'134}} % \
\section{コマンド \texttt{\tbs \char} について}
```

5. 図表

図表の出力位置を指定するオプションは, `h` は使わず, `t`, `b`, `tbp` などを指定して, ページの上端か下端に配置してください.

表のキャプションは表の上に, 図のキャプションは図の下に書いてください.

キャプションの幅を図表の幅に合わせたい場合には, 幅を指定してキャプションを `\capwidth` を使って, その幅で折り返すこともできます.

```
\begin{figure*}[t]
\begin{center}
\epsfile{file=xxxx.eps,width=90mm}
\end{center}
\capwidth=90mm %
\caption{図の説明文 ... }
\end{figure*}
```

取り込みが可能な図の形式は `eps` ファイルのみです. 取り込みには `graphics` パッケージ, または, `eclepsf.sty`, `epsbox.sty`, `epsf.sty` スタイルファイルのいずれかを用いてください. これらの利用方法については, [Goosens 97] や [中野 96] を参照してください.

POSTSCRIPT ファイル中では以下の PS フォントのみを用いてください.

```
Courier, Courier-Bold,
Courier-Oblique, Courier-BoldOblique,
Helvetica, Helvetica-Bold,
Helvetica-Oblique, Helvetica-BoldOblique,
Times, Times-Bold, Times-Italic, Times-BoldItalic,
Symbol, ZapfDingbats,
中ゴシック BBB, リュウミンライト KL
```

その他の PS, TrueType, OpenType のフォントを利用される場合は必ずアウトライン化してください.

図や写真の取り込みについてのその他の注意点です.

- 線画は, 文字の大きさや線の太さが, 本文の文字の大きさとバランスが取れるような大きさで取り込んでください.
- 写真およびスクリーンを多用した編状のパターンは 著者のプリンタと印刷会社の機器の解像度の違いなどによって, 黒くつぶれたり, 意図しない線が見え

表 1 `\newtheorem` の見出し

<code>\newtheorem</code> の宣言	出力例
<code>\newtheorem{definition}{定義}</code>	[定義 1]
<code>\newtheorem{definition}{Definition}</code>	[Definition 1]
<code>\newtheorem{theorem}{定理}</code>	[定理 1]
<code>\newtheorem{theorem}{Theorem}</code>	[Theorem 1]
<code>\newtheorem{proof}{証明}</code>	《証明》*
<code>\newtheorem{proof}{Proof}</code>	《Proof》*
<code>\newtheorem{lemma}{補題}</code>	[補題 1]
<code>\newtheorem{lemma}{Lemma}</code>	[Lemma 1]
<code>\newtheorem{corollary}{系}</code>	(系 1)
<code>\newtheorem{corollary}{Corollary}</code>	(Corollary 1)
<code>\newtheorem{example}{例}</code>	(例 1)
<code>\newtheorem{example}{Example}</code>	[Example 1]
<code>\newtheorem{proposition}{命題}</code>	<命題 1>
<code>\newtheorem{proposition}{Proposition}</code>	<Proposition 1>
<code>\newtheorem{assumption}{仮定}</code>	[仮定 1]
<code>\newtheorem{assumption}{Assumption}</code>	[Assumption 1]

* 番号が付きません。

る場合があります。

6. 数 式

6.1 独立行の数式

独立行の数式では `$$` ではなく、`\[` や `equation` 環境を用いてください。

`jsai2e.cls` には `fleqn.sty` を組み込んでおり、左寄せで数式が出力されます。

数式は文書の幅をはみ出しやすいので、特に注意してください。

6.2 アメリカ数学学会 (AMS) のスタイルファイルの使用

`amsmaths` スタイルなどを用いて利用できる以下のフォントは利用可能です。

`msam5`, `msam6`, `msam7`, `msam8`, `msam9`, `msam10`
`msbm5`, `msbm6`, `msbm7`, `msbm8`, `msbm9`, `msbm10`

`amsmath` スタイルファイルを用いる場合は

- `\documentclass` のオプションに `fleqn` を指定してください
- 数式番号の参照は、`amsmath` の `\eqref` を用いてください

その他、`amsmath` スタイルファイルの詳細は、[Goossens 94] や [中野 96] を参照してください。

6.3 `\newtheorem` について

`\newtheorem` は、本誌の体裁に従って調整してあります。日本語モード、英語モードそれぞれに、表 1 のようなものが定義されています。

7. 参 考 文 献

7.1 BIB_{TEX} を使わない場合

本誌の `\bibitem` の記述は以下のとおりです。

```
@Article{jml:86,
  author = "J. R. Quinlan",
  title = "Induction of Decision Trees",
  journal = "Machine Learning",
  year = 1986,
  volume = 1,
  pages = "81--106"
}

@InProceedings{icml:96,
  author = "Y. Freund and R. E. Schapire",
  title = "Experiments with
         a New Boosting Algorithm",
  booktitle = "Proc. of the 13th
               International Conference
               on Machine Learning",
  year = 1996,
  pages = "148--156"
}

@Book{michell:97,
  author = "T. M. Michell",
  title = "Machine Learning",
  publisher = "The McGraw-Hill Companies",
  year = 1997
}

@Article{jjjsai:92,
  author = "山西 建司 and 韓 太舜",
  title = "{MDL} 入門: 情報理論の立場から",
  yomi = "Yamanishi and Han",
  journal = "人工知能学会誌",
  year = 1992,
  volume = 7,
  number = 3,
  pages = "427--434",
}
```

図 2 `.bib` ファイルの例

`\bibitem[Quinlan 86]{jml:86} J. R. Quinlan, ...`

掲載順は、和文・英文の文献を含めアルファベット順です。

引用は [Quinlan 86] のように著者名と年の間に空白を入れてください。

文献を複数引用する場合は [Quinlan 86][Freund 96] とせず、[Quinlan 86, Freund 96] のようにまとめてください。

7.2 BIB_{TEX} を使う場合

BIB_{TEX} 用のスタイルファイルを使う場合は一緒に配布されている専用のスタイルファイル `jsai.bst` *2 を使ってください。

使い方は、参考文献の所定の箇所に

```
\bibliography{btxsample}% .bib ファイル名
\bibliographystyle{jsai}% jsai.bst スタイルの指定
と指定します。
```

データベース `.bib` ファイルの例を図 2 に示します。

詳しくは BIB_{TEX} や、 jBIB_{TEX} のドキュメント [松井

*2 `jsai.bst` は松井正一氏 (財) 電力中央研究所 情報システム部) 作成のものに手を加えて作りました。バージョンは BIB_{TEX} が 0.99c, jBIB_{TEX} が 0.30 です。

94, Patashnik 88] を参照してください。

8. ファイルの提出について

原稿およびファイルの提出については「原稿執筆案内」を参照してください。ここではファイルの提出の際の注意点を挙げます。

- 原稿の \LaTeX ファイルは、メインのファイルにインクルードまたはインプットするのではなく、必ず 1 本にまとめてください。
- 著者独自のマクロなど、コンパイルに必要なソースは必ず添付してください。
- なお、使用されるパッケージで、一般サイトにないものを使うときは必ず原稿と共に使ったスタイルファイルを添付してください。ただし、最終組版の段階でそれらパッケージが使えなくなることがあります。特殊なパッケージを使用される場合は十分な配慮をお願い致します。
- 図の ps および eps ファイル、 \BibTeX の生成する bbl ファイルも必ず添付してください。
- 原稿全体をフォーマットしたのち PDF ファイルに変換したもの（変換できなければ、POSTSCRIPT ファイルに変換したもの）を添付してください。

◇ 参 考 文 献 ◇

- [Goosens 94] Goosens, M., Mittelbach, F., and Samarin, A.: *The \LaTeX Companion*, Addison-Wesley (1994). (邦訳: *The \LaTeX コンパニオン*, アスキー書籍編集部 監訳, アスキー出版局, (1998))
- [Goosens 97] Goosens, M., Rahtz, S., and Mittelbach, F.: *The \LaTeX Graphics Companion*, Addison-Wesley (1997)
- [松井 94] 松井 正一: jbtbst.doc, btxbst.doc を翻訳するとともに、日本語用に修正, 追加を加えたもの (1994)
- [Patashnik 88] Patashnik, O.: *Designing BibTeX Styles*, The part of BibTeX's documentation that's not meant for general users (1988)
- [中野 96] 中野 賢: *日本語 \LaTeX 2 ϵ ブック*, アスキー出版局 (1996)

◇ 付 録 ◇

A. \LaTeX 2.09 版の利用について

人工知能学会のスタイルファイルは \LaTeX 209 版もあります。アスキー版のバージョン 2.09<24 May 1989>以降、もしくは NTT 版 \TeX の Version 1.12 以降を対象にしています。ただし、同じ文書を \LaTeX 版で組版した場合と \LaTeX 2 ϵ 版で組版した場合とは完全に同じ結果になりません。

\LaTeX 209 版用のファイルは以下のとおりです。

jsai.sty	スタイルファイル
template209-j	日本語論文用テンプレート
template209-e	英語論文用テンプレート
template209-o	論文以外のテンプレート

\LaTeX 2 ϵ では jsaiart.cls や jsaiopt.cls などのクラスファイルを用いましたが、 \LaTeX では

```
\documentstyle[originalpaper]{jsai}
```

のように、documentstyle と jsai.sty を用います。他は、ほぼ \LaTeX 2 ϵ 版と同じです。

B. profile-2e.sty について

profile-2e.sty は、最終版の作成のため、事務局で用いるもので、著者には関係ありません。ですが、簡単に説明しておきます。これは、著者紹介に写真を取り込むためのスタイルファイルで、\usepackage によって graphicx パッケージと共に用いると、\profile に写真を取り込む引数が追加されます。

```
\begin{biography}
\profile{m}{知能 太郎}{著者の略歴}{portrait}
\end{biography}
```

このように記述すると、portrait.eps (拡張子は小文字) という PS ファイルが取り込まれます。すなわち、portrait を写真のファイル名に合わせて変更します。写真の比率は縦:横が 6:5 です。

C. 巻頭言などの書式

※ 巻頭言

```
\documentclass[commentary]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{タイトル}
\author{
  \commentator{著者名}{日本語所属名}
}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

※ 特集「……」にあたって

```
\documentclass[foreword]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{タイトル}
\author{
  \commentator{著者名}{日本語所属名}
}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

※ 随想

```
\documentclass[essay]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{タイトル}
%\jtitle[柱用日本語タイトル]{日本語タイトル}
\author{
  \commentator{著者名}{日本語所属名}
}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

D. 巻末掲載物の書式

※ 研究所紹介

```
\documentclass[laboratoryreport]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{紹介する研究所名}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

※ イベントだより

```
\documentclass[eventreport]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{タイトル}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

※ 会議報告

```
\documentclass[conferencereport]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{タイトル}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

※ 用語解説

```
\documentclass[glossary]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\jtitle{タイトル}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
%\end{Calendar}
\end{document}
```

※ 書評

```
\documentclass[bookreview]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\bookinfo{タイトル, 出版社, 発行年}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

※ 文献紹介

```
\documentclass[paperview]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\bookinfo{タイトル, 出版社, 発行年}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\end{document}
```

※ カレンダー

```
\documentclass[calendar]{jsaiopt}
\Vol{16}   %%論文誌の巻数
\No{6}     %%論文誌の号数
\SubNo{c} %%論文番号
\FromTo{年月日}{年月日}
%\setcounter{page}{1}
\begin{document}
\maketitle
%% 原稿の内容（省略）%%
\begin{Calendar}{会議などの名称}
  \Date{開催日付}
  \Location{開催場所}
  \Contact{連絡先}
  \Note{注意書き}
\end{Calendar}
\begin{Calendar}{会議などの名称}
  \Date{開催日付}
  \Location{開催場所}
  \Contact{連絡先}
  \Note{注意書き}
\end{Calendar}
\end{document}
```